

# こどものための博物館 百周年！

—ブルックリンこどもの博物館「グローバル・シューズ展」に触れる—

— 瀬 和 夫

こどものための博物館は大阪市扇町にあるキッズプラザ大阪をはじめとし、日本でも急激に増えはじめています。

「こどものための」という明快なターゲットが示すように、利用者はなにを求め、館側の伝えたいことがどうすれば伝わるのかといった課題が直接に降りかかってくる。これにより、展示はオブジェクト・センタード（資料重視型）から、クライアント・センタード（利用者重視型）に向く。そして、次のような標語もある。I hear and I forget. I see and I remember. I do and I understand. この考えから、展示にハンズ・オンという手法を用いることが重視されることになる。

アメリカ合衆国ではこどもの博物館が280館をこえ、その発祥の地はニューヨークのブルックリンこどもの博物館（Brooklyn Children's Museum）である。この館は時代の変化を強く受けとめ、建物も展示も変化しつづけてきた。現在、2万7千点のコレクションをかかえる。今ある建物はアフリカ系やヒスパニック系のアメリカ人が多く住む町の一角、公園の地下にある。この地域環境を反映して、芸術、科学、環

境だけでなく、多様な文化についてのプログラムにも力が入る。

その多様性を世界中に押し広げ、数多い「クツ」のコレクションをもとに、昨年5月から10月まで、創設百周年を記念する「グローバル・シューズ展」が企画、展示された。現在、北アメリカの7つの博物館を巡回展示中である。ここでは、こどもの博物館の一端を知るために、その展示の様子を紹介しよう。

この展示は主にハンズ・オン、フット・インできる世界のクツ屋さんと世界中からのクツ工場という2つのエリアからなる。この構成は調査の結果、こどもたちがクツで連想する事柄の中でこれが多かったと言う。こうした調査はハンズ・オン展示では必要不可欠であり、基本的な概案づくりからデザイン当初の絵コンテをはじめ、こどもたちに意見を聞き、評価を受けるというのは至極当然となってきた。

展示ではこどもたちが身に付け、ロール・プレイし、調査活動をすることで、そのクツから人や場所の手がかりを得る方法を探索できるようになっている。解説文は足型のキャプション・プレートに英語とスペイン語が併記される。



専用テーブルでクツの注文デザインを描く

クツの店では、涼しそうなクツであるトンガのヤシのサンダルを探し、その源となる気候や文化にマッチしたクツの姿の糸口をつかむ。国やそこに住む人々のことを学ぶのにオランダや韓国、ペルーのクツやサンダルも観察する。16カ国のこどもたちがクツになりきって、クツの目線から観て描いた絵や詩のコレクションとそのこどもたちの生活や作業の様子を見ることが出来る。クツに関わる話や写真のある本も読む。また、自分のサイズを様々な秤で測る。カウボーイブーツやファンダワラ、消防士のクツなど特殊な仕事や生活、スポーツのためにデザインされたクツを試す。キリバチやモンゴル、アイスランドの家族のクツの特徴をみるためショーケースの中に身を置く。これらは材質を確認し、組み合わせ、クツに手紙を書き、計量し、履き、環境に入り、クツを履いていた人を確認するもので、地理、気候、民族、家族など、ことごとく五感でしかも体系だって感じ取れるよう配慮される。

さて、クツの工場ではロール・プレイすることで、世界のクツの製作過程を探る。まず、世界地図を把握し、電話で世界のスニーカーの仕入れをすることからはじまる。そして、材料試験、専用テーブルで注文デザイン、よちよちデザイナーはシュー

ズのパネルはめ込み遊び。組立ライン生産では、モカシンやコンバースのスニーカーを自分でつくる。最後に船積み箱で、クツの製作ビデオを見ながら、材質やクツの出入荷をチェックして生産を完了する。

クツの宣伝までもプログラムに組み込まれるここでは、現実にあるプロセスを知らず知らずのうちに感じ取ることが可能だ。個別には、展示開催後、材料試験コーナーが不評なので、改良案を練ることも忘れてはいない。

このようにハンズ・オンを主とするこどもの博物館の展示は、その期間中も利用者の様子を観察してより親しみやすく学びやすいものにするための努力が払われることになる。



「クツ」がつくられた材質と合わず



アメリカ・インディアンの底の平らなモカシンという「クツ」を編む